

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 8 日現在

機関番号：13101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2015

課題番号：23792641

研究課題名(和文) 出生直後の新生児と母親の相互コミュニケーション手法の開発

研究課題名(英文) Development of mutual communication method of newborns and mothers immediately after birth

研究代表者

石田 真由美 (ISHIDA, Mayumi)

新潟大学・医歯学系・助教

研究者番号：40361894

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：出生直後の母子の相互作用に注目し、母子の早期接触の時期から新生児が持っている潜在的な能力を親が見つけ、気づき、理解し、個々の児の長所や得意とする能力を引き出すことにより、新生児と母親間の相互コミュニケーション手法の開発になると考え研究をすすめた。まず、早期接触時に母子間にどのような事象が生じているかを観察し、また早期接触によって生じた母子相互作用をどのように感じ、どのような体験としてとらえたかをインタビューデータから系統的に分析した。しかし、分娩直後は我が子の潜在的能力を見出すことや気づくまでにはまだ時間がかかり、意識的に子の能力を引き出すことができる状況には至らないことが理解できた。

研究成果の概要(英文)：Focused on the interaction of the mother and child immediately after birth, parents will find the potential ability of the newborn has from the time of early contact of the mother and child, awareness, understanding, by drawing the ability to excel and of the individual child advantage and recommend the study considered to be the development of mutual communication technique between the newborn and the mother. First of all, to observe how such events between the mother and child at the time of early contact has occurred, and how I feel in the mother-child interaction caused by the early contact, systematically analyze what was captured as what experience from the interview data did. However, immediately after calving takes still time before notice or to find the potential of their children, it was understood that not lead to situations that can exploit the power of consciously child.

研究分野：母性看護学・助産学

キーワード：新生児 母子関係 愛着行動 早期接触

1. 研究開始当初の背景

2001年、厚生労働省と文部科学省が母子保健の国民運動計画として『すこやか親子21』を掲げた。その中に「安心して子どもを産み健やかに育てるために妊娠・出産に関する安全性と快適さの確保」と「子どもの心の安らかな発達の促進と育児不安の軽減」が謳われている。母子保健は生涯を通じた健康の出発点であり、次世代を健やかに育てるための基盤となる。『健やか親子21』がスタート後、子育てにやさしい地域づくりや支援体制の整備などが見直されてきており、2005年におこなわれた中間評価において具体的な取組方策を掲げた行動計画を策定し、さらに運動計画期間の4年間延長を行ない『健やか親子21』の更なる推進が期待されている。

これまで、母子間の愛着形成を促進し妊娠・出産期を楽しいと感じることが出来るためのウェルネス看護の必要性和重要性を感じ、平成16年度～18年度 科学研究費補助金・若手研究(B)『母性領域のウェルネス看護診断の構築に向けて』(課題番号:16791377)にて研究を進めてきた。この期間にポジティブな感情に働きかける支援をおこなうことは母性意識の向上に重要な役割を果たすと考え、この研究により、母親への看護支援・方策について考察することができた。また、看護者が支援をおこなうだけでなく、母親や新生児自身が本来もつ反応・能力をお互いが引き出し合うことにより、母子の相互作用が働き愛着形成が強まる点に注目し、平成20年度～22年度 科学研究費補助金・若手研究(B)『新生児の簡易式行動評価スケールの開発』(課題番号:20791724)にて研究を進め、新生児の行動評価に研究主眼をおいてきた。

今回、これらの結果を踏まえ、出生直後の母子の相互作用に注目し、母子の早期接触の時期から新生児が持っている潜在的な能力を親が見つけ、気づき、理解し、個々の児の長

所や得意とする能力を引き出すことにより、より相互作用が促進され、新生児と母親間の相互コミュニケーション手法の開発になると考えた。

2. 研究の目的

母親自身が出産直後から我が子の潜在的な能力を見出し、気づき、理解し、我が子の個性や得意とする能力を引き出すことができるような相互コミュニケーション手法を開発することを最終目的とした。まず、分娩直後の早期接触時に母子間においてどのような事象が生じているかを観察し、また母親が早期接触によって生じた母子相互作用をどのように感じ、どのような体験としてとらえたかをインタビューデータから系統的に分析し、母子の早期接触が母親の愛着行動にどのような影響を与えるのかを知ることを研究目的とした。出産直後の母子ケアに最も関わる助産師や看護師が、この手法を妊娠中からの保健プログラムに導入することにより、母子愛着形成の促進を図ることが出来ると思った。

3. 研究の方法

(1) 対象

以下の条件をみたす母子とした。

正産、経膈分娩、母体に重症の合併症がない、成熟児、アプガールスコア8点以上。

(2) データ収集期間

2011年4月～6月。

(3) データ収集方法

【画像データ】分娩直後の早期接触場面を2台の映像機器(SONY Super Steady Shot® DCR-SR220)を使用して録画、録音した(図1)。1台目(映像機器)は、母子の全体像と児の視線や顔周囲のしぐさを観察するために、定点での撮影をおこなった。2台目(映像機器)は、母子の表情や母子間のアイコ

ンタクトなど細部の観察をするために、研究者が機器を手を持ち移動撮影した。なお、録画時間は、分娩直後の早期接触を開始してから10分間とした。また、撮影時に気づいたことをフィールドノートに書き留め、分析の際の補足データとした。内容の適切性を確保するために、共同研究者2名を対象とし、プレテストをおこない、円滑に調査を実施できるようにした。

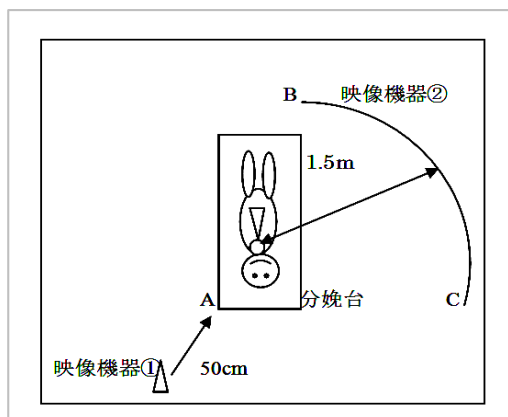


図1. 母子と映像機器の配置図

【インタビューデータ】産後2日目に研究対象者と共に、早期接触時の映像を見ながら、当時の行動や反応について感じたことや気づいたことなどの語りを録音し、データを収集した。

(4)分析方法

画像データは、15秒毎に母子の行動をフィールドノート化し、母子間で起こった事象（行動や反応、発言など）の生起率を求めた。

インタビューデータは逐語録にし、早期接触時に母子に生じている現象について母の思いを中心にコード化しカテゴリーに分け、帰納的に分析をおこなった。分析においては、共同研究者4名にて一致度を確認し、作業を進めた。

(5)倫理的配慮

本研究は、A病院看護部倫理委員会の審査・承認を受け実施した。対象者に対しては、研究目的、個人情報保護、参加の自由、データの厳重管理等に関して文書と口頭で説

明し、同意を得て実施した。

4. 研究成果

(1)文献収集と文献レビュー

出生直後の新生児の行動に焦点をおいた研究や、分娩直後の母子の愛着行動に関する研究の文献収集をおこなった。医学・看護学分野のみならず、発達心理学や行動分析の視点からも文献レビューをおこない、新生児の行動に関する基礎的データを把握した。

また、新生児の行動のみならず、母親の行動も併せて分析していく必要があると考察できた。

(2)画像データの分析結果および考察

画像データについては、計191の観察セッションが得られた。生起率は、母の行動では『児を見つめる』、『児の背中をトントンする・頭をなでる』などがあつた。児の行動では『頭を反らせる』といった母親の方へ視線を向けようとする様子が多く見られた。その他に『ジッと開眼する』、『モゾモゾする』といった行動が見られた。

(3)インタビュー調査の結果および考察

インタビュー内容を質的帰納的に分析した結果、72のコード、30のカテゴリー、13のコアカテゴリーが抽出できた(表1)。(以下、<>はコード、はサブカテゴリー、【】はカテゴリーを示す)。

早期接触時に母親は、児を見つめ観察するというような【視覚的な確認】と、児の身体に触れ【接触時の実感】を得るといった2つの現象を基盤とし、その後の感情が芽生えていることがわかった。時には「(児の背中をトントンする)手の動きはほとんど無意識です」といった【無意識な行動】によって児との接触を持つ場面もあつた。これらの現象から、無事に出産を終えたという安堵感や児と対面したことの嬉しさなどの【嬉しい感情】が生まれ、その反面 壊れそうな存在に対する怖さ 児の生命に対する不

表1．分娩直後に早期接触を実施した母親の感情や気づきについての内容分析

カテゴリー	記録単位 数(%)	サブカテゴリー
視覚的な確認	23 (23.7)	児の動きの観察， 児の印象，児の状 態の観察，妊娠中 に抱いた児のイメ ージとの対比，部 分的な可視
接触時の実感	14 (17.5)	児の重み，児のあ たたかみ，児の柔 らかさ，児に触れ ていたいという思 い，忘れられない 感触
児に対する戸惑 い・不安	16 (16.5)	児の扱い方がわか らないことに対す る困惑，壊れそう な存在に対する怖 さ，予測できない 行動への疑問，児 の生命に対する不 安，カンガルーケ アへの不安
喜ばしい感情	13 (13.4)	児と対面したこと の嬉しさ，無事に 出産を終えたとい う安堵感，ずっと 見ているも飽きな い
母としての自 覚・使命感	9 (9.3)	児に対する語りか け，児を落として はいけないという 責任感，児に弱い ところを見せられ ないという母とし ての強さ，児の行 動を母なりに解釈 する
児に対する発見 と驚き	4 (4.1)	児に対する発見と 驚き
無意識な行動	3 (3.1)	無意識な行動
産んだことの達 成感	3 (3.1)	産んだことの達成 感
生きていること の実感	3 (3.1)	生きていることの 実感
不思議な感情	3 (3.1)	おなかの中にいた 児を目の前にして 湧いた不思議な感 情
環境に対する安 心感	3 (3.1)	環境に対する安心 感
貴重な体験	2 (2.1)	貴重な体験
産んだことによ るさみしさ	1 (1.0)	児がおなかの中か らいなくなったさ みしさ

安 などの【児に対する戸惑い】が生まれていることがわかった。同様に，【児に対する発見と驚き】，【生きていることの実感】，【不思議な感情】も得られていた。

また，自分自身に対しては【産んだことの達成感】や，児がおなかの中からいなくなったことによる【産んだことによるさみしさ】も感じていた。これらをすべてとらえた上で，母親は「落としちゃいけないと思って」という思いや，会陰部の縫合痛に耐え「自分の処置をしている時も痛かったですけど，赤ちゃんがいたから弱いところ見せられないかと思って」という思いから【母としての自覚・使命感】が芽生えてくるのがうかがえた。

ルヴァ・ルーピンは母親の分娩直後の心理として「最初の観察には，目で見て，触れて観察したいという思いがある。(中略)また，分娩後に生じる，見たい，触れたいという衝動は新生児を外在化し，客観化することとなる。視覚的接触は，子どもの確認と位置づけにおいて，子どもとの関係での自己の方向付けにとって第1の重要性をもっている。」と述べている。このことから，分娩直後に母親が児に対して，目で見ること・触れて感じる事が基本となっていることが分かる。また，これらの現象は【貴重な体験】として捉えられ，自分がこの子の母親であるという母親役割の獲得にもつながっていると言える。

さらに，このような一連の現象が生じるためには，母親が早期接触を安全に安心して行う環境を整えることが大切であり，【環境に対する安心感】の基に成り立っていると考えられた。

(4)まとめ

これまで取りまとめた画像データと質的分析結果の分析結果をふまえて考察すると，母子の早期接触はより近くで児の様子を観察でき，肌と肌の直接的な児との触れ合いも

可能となる．その中で，母親には様々な感情が生じ，母としての自覚や使命感が芽生えてくる事が明らかとなった．そしてそれは，母子の早期接触を近くでサポートする医療者が存在し安全で安心できる環境が前提となることもわかった（図2）．

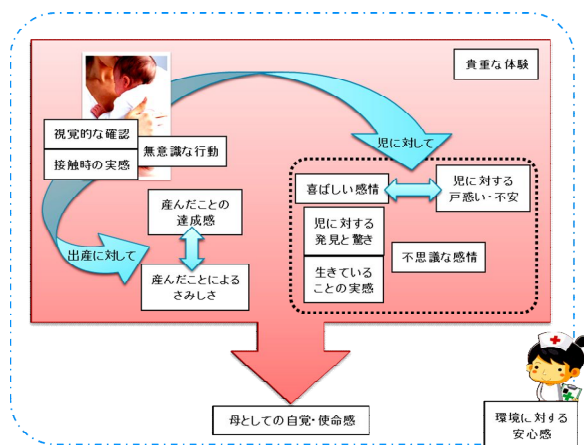


図2 .早期接触時に母親に生じている現象

本研究は，出生直後から母親が我が子（新生児）の潜在的能力を見出し，気づき，理解し，我が子の個性や得意とする能力を引き出すことができるような母子間の相互コミュニケーション手法を開発することを研究目的としていた．今回の結果では，出生直後の母親が早期接触を実施することで，児の様子をより身近で観察し，喜ばしい感情と同時に児に対する戸惑い・児に対する発見と驚きなどを感じ，さらに自分自身に対しては産んだことの達成感や母としての自覚・使命感を感じていることが明らかとなった．しかし，分娩という大役を果たしたばかりの状況で，我が子の潜在的能力を見出すことや気づくまでにはまだ時間がかかり，意識的に子の能力を引き出すことができる状況には至らないことが理解できた．

5．主な発表論文等

〔学会発表〕(計1件)

清水さなえ，新保亜希子，松井宏美，荒木理恵，石田真由美，分娩直後のカンガルーケアに伴う愛着行動の分析，第53回日本母性

衛生学会学術集会，2012.11.17.アクロス福岡（福岡県・福岡市）

6．研究組織

(1)研究代表者

石田 真由美 (ISHIDA, Mayumi)

新潟大学・医歯学系・助教

研究者番号：40361894

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし